

タウン情報③⑧ 1

足入から結婚式

昔から仲人の草履切らしと申しましたが、誠に大変な仕事です。今とは異って恋愛結婚は普通の家庭では、絶対に赦されません。そして、財産も同額位でないと頼みにも行かれませんでした。よく、結婚式が済んでから、翌朝始めて嫁さんの顔を見たと言う人も有りました。仲人をやる度毎に暮になると、鮭や鱈を御歳暮として贈られるので、台所の梁から多さん下げるのを自慢にする者も居ります。両方の親達の承諾を経て、足入りと申しまして幾日か婚家へ行き、家人と共に寝起を共にして凡その家風を見習い、始めて結納の段取りとなります。当時の結納金の相場は其の家の財産により異なりますが、普通式拾円から五拾円位が相場でした。結納の折に仲人は、付人と随えて嫁の家へ参上、昔からの恒例の言葉を述べ結納品を贈り嫁方では謹んで受領して結納の儀式は済みます。

結婚式当日は、購中親類の人々が、朝から御手伝で大賑で赤飯や手打うどん作り、煮しめと分業です。大勢の客の家では、大宮前の大野屋酒店より四斗樽の樽を仕入れ、仕出やは高井戸正用の魚国か牟礼宿の三魚やに注文して、披露宴用の料理を作ります。

其のころ、料理引出物一人前で三円位が相場です。〇〇所の

の嫁入りの節は、五円の御馳走と言って、其の頃としては豪華版でした。先ず当日は村中の若い衆に嫁入の通達が廻り、にぎりやに御酒が幾升か届けられ夜になると、若衆は三々五々と集り御酒を御馳走に嫁の来るのを待っています。

どんどん橋まで来るそこから、嫁入りの箆筒他道具を満載した大八車を取り囲んで引きながら、目出度目出度の若松様と声を張り上げて長持唄を唄いながら、僅かの道でも二、三時間掛かって婚家へ着きます。

当家では定紋付の手丸提灯とたい松を焚いてお嫁さんを迎えます。久我山の習慣でお嫁さんは仲人婆さんに手を引かれて、お勝手口から座敷へ通されます。先ず、両仲人の挨拶から始まり、嫁の引っ越し当家両親の受入御近所の子供男女に依り、女蝶男蝶の合盃も目出度く終り、両方の親類同志の紹介の挨拶等万事式は滞りなく終わり、披露宴に移り両隣家に取り持ち役で活躍いたします。お酒や御料理の膳部の合間に搗き立ての餅吸物、蛤さよりの結びで吸物は終わり、其の間に一、二回のお色直しが行われます。

お台所で御手伝の主婦達が、大きな茶碗に御飯を出来る限りのお高盛りにして、お嫁さんに出して食べて頂くのも当地の習慣です。披露宴が盛り上がる頃に自慢の人が祝唄「ハツウセ」を唄へば、居並ぶ人も続いて合唱

します。「これさ一まのな一え、お嫁さまのお里は、何処かな一え、知らねども、立姿え、座り姿の品の良さ、気立エーやさしく、仕えるでせう。と繰り返して唄います。

若い衆はお嫁さんを無事送り届けた役目も終わり、広い庭に高く積み上げられた薪の焚火の囲りに縁台を出し、お勝手から運ばれた酒肴を御馳走になり、お嫁さんを褒めたたえます。近所の人々は花嫁さんを一目見ようと、大勢集まり、障子に指で穴をあけて時間の経つのも忘れて見物します。

披露宴が終わり、嫁方の御客様や親類、近所の方がお開きで帰る頃は東の空が明るくなります。

秦 暢之著 久我山を回想してより抜粋